
Dream rabbit

ゆめなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dream rabbit

【Zコード】

N1794U

【作者名】

ゆめなし

【あらすじ】

平凡な中学生、蓮。

蓮はある田舎に帰ると、ある兎の人形を見つける。

人形を手に取り、気がつくと、そこは別世界だった。

そこで出会ったのは「夢兎」と名乗る小さなウサミミーフードの小学生ほどの子供だった。

夢兎の正体とは？

蓮がこの世界に来た理由とは？

今此処に、一つの奇跡の物語が始まる

【プロローグ】 初兎。

兎は寂しいと死ぬ。

そんな事を聞いたことがある。

まあ、小学生の頃、俺はそれを身をもつて知った訳だが‥。

で、今現在俺、「神崎蓮」は、中学校の教室で「兎は寂しいと死ぬんだからね！私、死にたくないから別れるわ。さよなら」と言わ
れ、彼女に振られている。

自分＝兎と言う馬鹿な思考を持つ女なんて最初から興味ないから別
に傷つきはないが。

告白されたから付き合つた。

それだけ。

一方的に好きになられても俺はあまり人を好きになれない。
だからこんな感じで振られる事が多い。

彼女が俺の前から去ると、俺は大きな溜息をついた。

「はあ…。あーあっ！女ってめんどくせえっ！あああっ
一人になつたとたん、怒りとストレスを開放する。

教室には俺の声だけが響いた。

もう5時。

今日は部活も休みで、俺はせつと帰ろうと、自転車置き場へ急ぐ。

帰り道、小学生が少し遅く下校しているのを見かける。

俺も小学生の頃はよく遅くまで学校に残つて遊んでいた。
まあ、見つかつたら先生に「早く帰れ」と言われたけど。

ちょっとした坂を上ると、赤く光る信号が見える。

「げつ、赤かよ。ここ長いんだよなあ…」

そんな事を呟きながら待つてると、隣で小さな子が信号を待っている事に気がつく。

身長が低い…小学生だらうか？

まあ、小さく感じるのは俺の身長が中2にして、約170cmと言う事もあるだろ？が。

あ、でもあれか。

成長期だし。慎重もそりや伸びるか。
成長期だし。慎重もそりや伸びるか。
成長期だし。慎重もそりや伸びるか。

何か俺の身長の話になつてゐるし。

そんな事を一人で思つていると、信号が青になる。
すると、小さな子は、走りながら信号を渡る。
そんな後姿が「可愛い」とか思つたり。

無事家に帰ると、愛犬のダックスフンドが抱きついてくる。

「おわつ！？」ヤナ、どしたんだよ？」

抱きかかえてやると、顔中を舐め回してくれる。

「ちよ、やめろよ！」

床におりすと、リビングへ走つていく。
とりあえず靴を脱ぐと、玄関に自転車のかぎを置いて、リビングへ入る。

「母さん？…買い物か？」

リビングには誰もいなかつた。

ワンワンッ

ヤナがいきなり吠え出す。

俺：いや、違う。後ろか？

俺の後ろ…誰かいるのか？

振り向いて確かめたい。でもなぜか足が動かない。
思わず目を瞑る。

その瞬間、田蓋の置くに何かが見えた。

「…兎…？」

「う…！」

目を開けると、俺の足元には、今までなかつたはずなのに、兎のぬいぐるみが落ちていた。

そのぬいぐるみを手に取つたのが運の尽き。

「え…」

何が起こつたのか理解できなかつた。

いきなり田の前が真っ暗になつて行つた。

何故こんなことになつてしまつたんだ？

俺はただのそこらへんにいる中学生だぞ！？

こんなアニメみたいな展開あつていいいのかよ！

俺は堕ちて行つた。

深い深い闇の奥へ。

その先にどんな世界があるかも知らないで。

【第一話】 会鬼[。]

蓮^{れん}が目を覚ますと、そこは一言で言つて「別世界」。

灰色の空、紫色の雲。

そんな暗い世界の冷たい地面に酷い頭痛が襲つ蓮は仰向^{むけむけ}で倒れていた。

「つ……。どこだよ此處^{こしょ}…」

起き上がるうとしても腕に力が入らない。

蓮は倒れたまま、以下の事を考えた。

「何故自分はこんなところに居るのか」

「此處は何處なのか」

「あのぬいぐるみはなんだつたのか」

だが、どんなに考えても答えは見つからない。

答えてくれる相手が居ないのだから。

周りを見渡しても木が数本生えている程度だ。自分はこれからどうなるのだろう?

そんな事を考えた蓮は、後悔した。

後悔の理由は、何も食せずに此處で飢え死にする自分の姿が思い浮かんだからだ。

どこかも分からぬ場所で死ぬなんて嫌だ。

蓮は人が居ないかを必死で確かめる。

「…。おい!! 誰か居ないのかよ!! 何處だよここ!! 教えろよ

!! !! !!

力いっぱい叫ぶ。

誰かが近くに居るかどうかも分からぬまま。

蓮は誰かが自分の声を聞いてくれる小さな可能性を信じた。

ザツ…

「…！」

微かに足音のような音がした。

だが、力が入らず、その方向を見ることが出来ない。

「…。」

足音の主は、蓮の頭の前で足を止め、蓮を見下ろす。その人物の顔を見て、蓮は驚く。

帰り道、信号に止まっていた小学生。

その小学生が今、この不気味な世界で中学生の蓮を睨みつけよう見下ろしていたのだ。

でも、一つだけ違つたのが服装と顔のピエロのようなメイク。

帰り道見た時の服装は、セーラー服だった。

だが今は、ピンクのウサミミワードと黒い、世間的に黒いマスクプレの様な格好だ。

そして、ピエロの様なメイク。

とは言つても、白塗りにしているわけでも赤鼻を付けているわけでもなく、ただ単に涙のペイントをしているだけだ。

「…君…。誰…だ？」

蓮は、頭痛のせいで、上手く話せない。

「…自分には名前と言つものは存在しません。ですが、自分の呼び名、すなわち。呼ぶときの名前は夢兎ゆめとと言います。自分は貴方をкиング、すなわち。自分の上司の下へ連れてくるようにと指令を受けました。なのでこれより、自分は貴方を強制的に城へ連れて行きます。」

す。」

少し早めのスピードで、訳のわからない長い事を一方的に言わた

蓮の頭の中は混乱状態になっていた。

そんな状態の蓮を、夢兎と名乗る人物は、腕を思いつきり引つ張つて半強制的に立たせると、何かを唱え始める。

「…………」

すると、蓮と夢兎の周りを闇が囲んだ。

「え、ちよ…何だコレ!…?」

* * *

取り囲んでいた闇がどんどん消えていくと、蓮はさきほど居たところはまったく別の場所に居た。

空は青く、雲は白い。

蓮が居た世界と同じだ。

そして、自然に囲まれている町が蓮の居る位置からは見えた。その美しい風景を見て呆然としている蓮と、その蓮を見つめる夢兎の背後から、男の人の声が聞こえた。

「俺達の世界へようこそ。蓮」

振り向くと、そこには同じ歳位の少年が2人立っていた。そして、その背後には外国にあるような大きな城。

「何だ此処…」

思わず蓮は呟く。

すると、少年の一人が微笑む。

「dream worldだよ」

「夢の…世界?」

【第一話】 食鬼[。]

「夢の…世界…？」

蓮が呟くと、もう一人の少年が頷きながら「そひ。まあ、お前の夢ではねえけどな」と、得意げに言ひ。

「え…じゃあ誰の…」

それを聞かれると、少年はムツとした顔になる。

「そんなの知らねえよ。誰のか知らないけど、俺たちはこの世界に生まれた。そしていつのまにか俺はこの国の王になっていたんだよ」王と言う単語に蓮は耳を疑つた。

この自分とあまり歳も変わらないであろう少年がこんな素晴らしい世界の王という事に驚いたのだ。

「夢鬼。お前は今から宴会の準備へ向かえ。ここを案内するから、終わるまでには完了しておけ」

少年は、夢鬼と呼ばれる子供に、容赦なく命令する。だが、そんな命令にも顔色一つ変えずに「了解しました」とだけ言い、夢鬼は城の裏へ走つていく。

蓮は、ここまで連れて来てくれた夢鬼が去つたとたん、不安になる。すると、もう一人の白髪の少年が蓮に握手の手を差しだした。

「はじめまして蓮。僕は彪雅。^{ひょうが}僕もこの国の王。これからよろしく」

彪雅と名乗る少年は、笑顔で言つ。

蓮も手を差し出すと、笑顔のまま、彪雅は蓮の手をとつた。

「あ、そういえば俺もお前に自己紹介しないつけ。俺は彪雅。^{ひょうが}ちなみに、彪雅は俺の弟だから。」

蓮は、彪雅の言葉を聞くと、さつきまで持つていた違和感の正体が分かつた。

「だから2人の顔は似てるのか」

その言葉を聞くと、2人は顔を見合せた。

「似てないよ？」
「似てないぜ？」
…。

(似てるじゃん)

「ま、そんな事は後でいいや。とりあえず中に入りつぜ。城の案内するし。」

珀雅は蓮の腕を掴むと、少し強引に引っ張る。

「え、ちよ…」

大広間

夢兎が大広間へ入ると、2人の人物が夢兎の元へ走ってきた。

「先輩つ任務ご苦労様です！宴会の準備、後少しですよ」

最初に夢兎に話しかけてきたのは、夢兎と同じ格好の小学生くらいの少年だった。

「…ですか。」^{せつづ}苦労様です刹兔。

刹兔と呼ばれる少年は笑顔で「はい」と答える。

「お疲れ様です夢兎さん。」^{ゆまと}こちらは後は食事準備のみです」

次に話しかけてきたのは刹兔や夢兎より、もつと小さな少年だった。

夢兎は、その少年の頭をなでる。

「ありがとうございます。今から食堂へ向かいます」

夢兎は、2人を連れて食堂へ向かう。

食堂

「…」これは何ですか

夢兎の前には兎の丸焼きが置かれていた。

「はい！兎の丸焼きですっ」

刹兔は元気よく答えた。

「そんな事は見れば分かります。自分は、これを蓮様が食できるかと聞いています」

昔は、兎の肉を食べる事も不思議ではなかつたが、現代ではあまりない事を夢兎は知つていた。

もし食べたとして、あまり口には合わないだろつ。

「人間つて何でも食えるんじやないんですか？」

刹兔がそんな質問をすると、夢兎と雪兎は同時に溜息をつく。

「人間の方が自分達より遙かに食せるものは少ないですよ」

それを聞くと、刹兔が「えええ！？」と驚いた。

「何か倉庫にありませんか？」

「あー…人間が食えるものですね…。えっと…卵とか米とか位です」

それを聞くと、考え込んでいた夢兎に、ひとつつの食べ物が思い浮かんだ

【第二話】 備兎

珀雅は、蓮の腕を掴んだまま、城を案内する。

蓮は腕に少しの痛みを感じながらも、珀雅に小走りで着いて行く。

「珀雅、蓮が痛そう。離してあげたら？」

彪雅は、蓮のもう片方の腕を掴む。

「はあ？んな訳ないだろ。な、蓮」

珀雅は蓮に問いかける。蓮は苦笑いに近い表情で頷く。
すると、珀雅は、「ほらな」と言いながら、彪雅の手を蓮から離そうとする。

「つ……。そう……分かった。」「めんね、蓮」

彪雅は、腕から手を離すと、数歩蓮から離れる。

「え、いや……別に……」

「蓮、そんな奴ほつとけ。まだ案内するところがあるし

珀雅は再び歩き出す。

「え、ちょ……」

* * *

大広間

彪雅を置いて、大広間に到着してしまった2人。

大広間には宴会の準備をしている兎の格好の子ども達が居た。

「うわっ、珀雅様！も、申し訳ございませんつまだ食事のご用意が

…

始めに珀雅に気付いたのは小さな少年だった。

少年は頭を深々と下げる。

「刹**せ**鬼…。夢**ゆめ**鬼がいながら何やつてんだクソガキ…。」

「あ、先輩は食事の準備します、「

「はあ！？まだそんな事やつてんのかよー…！」めん蓮、ちょっと待つてろ」

珀雅は、蓮の腕をやつと放すと、代わりに刹鬼の腕を掴み、食堂と思われる場所へ連れて行く。

* * *

食堂

「おい夢鬼！お前ふざけてんのか！！何ぢんたらやつてんだよ…！」

珀雅は勢い良く食堂のドアを開ける。

「ひうつ…！」、「めんなさい…！」めんなさい珀雅様…！」

謝つたのは雪**ゆき**鬼ゆきであり、夢鬼ではなかった。

「雪鬼、つむさいですよ。申し訳ございません珀雅様。準備は整いました。他の部下にもお客様のお迎えへ向かわせてています。」

夢鬼はいつも通り冷静に受け答える。

「あの…珀雅？」

蓮が食堂を覗くよつにドアを開ける。

「あ、蓮。いたの？」

「あ、ああ。何か。騒がしかつたから」

「『めん、もう準備できたらしいから、大広間で待つてろ』

珀雅は蓮を追い出すよつに食堂から出すと、夢鬼は、料理を並べ始める。

「なんだコレ。」

珀雅は夢兎の手にある見たことの無い料理を見て首を傾げる。

「ああ、これは人間界の食べ物です。何でしたっけ、オムライス？」

刹兎が満面の笑みで答える

夢兎は、雪兎の手を借りながら並べていく。

「珀雅様。準備整いました。」

「了解、おつかれさん。じゃ、俺もそろそろ蓮のところ行つてくる
珀雅はそういうながら食堂を出て行く。

「…はい」

夢兎は、食堂からすでに出て行つた珀雅へ深々と頭を下げた

【第四話】迷鬼

大広間へ再び戻つてみると、先ほどまでは準備をしていたはずの人
が居ない。

その代わりに、大勢の来客人が居た。

「蓮の席は夢兎に案内させるから、ついていけ」

多少命令口調な珀雅に少し顔をムッとさせた蓮だつたが夢兎が

「…」

と、言いながら蓮の腕を軽く引っ張ると、蓮は人混みの中、夢兎についていきました。

「おい。お前さつき準備してたんじゃ…」

「部下に頼みました。現在の自分の任務は貴方を席へ着席させ、そ
の後貴方の護衛をする事です。」

これが本当の即答と言う物だろうかと蓮が思つほど夢兎はすぐに返
答をした。

「・・・」

少々人にぶつかりながら進む蓮を他所に小柄なため人に当たらず
進む夢兎はズカズカと一人で進んでいく。

ついに夢兎を見失つてしまつた。

人が多いため場所も確認できない。

「マジかよ…。」

思わずいつものように叫びたくなつたが、さすがに今の状況で叫ん
だらただの変人だと思い、思いどどまる。
何をすればいいのかオロオロしていると、背後から声が聞こえた。

「どうしたの?」

「え」

振り向くと、そこには蓮と年齢もあまり変わらないでありますと思つ

少年が立っていた。

だが、決定的に違うのは、その少年の男とは思えないほどの美しさだった。

青い瞳に綺麗な黒髪。そして白い肌。

男である蓮でさえも惚れそうなほどの美少年だ。

蓮が少年を見ていると少年が口を開く。

「ん？ 僕の顔何かついてるかな？」

「え、あっ…。いや、すみません。えっと…俺、どうやら迷子で…」

大広間で迷子と言うのは人が多くてもそういう事と蓮は分かつていた為、小声で伝える。

「そ、うなんだ。あ、僕探してあげようか？」

「え、でも悪いです…」

「全然！開式まで暇だし。もしかして迷惑？」

少し残念そうに聞く少年の目を見ると「あ、いえ…お願いします」と思わず承諾する。

すると、少年の顔は笑顔となり、蓮の手をとり、握手した。

「僕は金雪^{かなゆき} 咲斗^{さきと}。よろしく！」

「え、あ、神崎 蓮です。」

「敬語なんて使わなくていいよ、蓮」

「あ…ああ。よろしく、咲斗」

「さあて、蓮が探してるのはどんな人？」

咲斗と名乗る少年は周りを見渡しながら尋ねる。

「んー…。あ。ウサミミフードの小さな子」

蓮が答えると、咲斗の方がピクリと動く

「…え」

「え？ どうした咲斗？」

「あ、いや…なんでもないよ。それでも、結構見つけやすい格

好の子なんだね。簡単に見つかりそう」

少しじこまかすようなそぶりを見せる咲斗にあまり蓮は違和感を持たず、頷いた。

「あ。蓮、あそこ」

咲斗は少し遠くを指差す。

その指の先には探ししている夢兎の姿があった。

「夢兎…。ありがとう、咲斗」

蓮は咲斗に軽く頭を下げる、夢兎の元へ向かおうとした。

…が

「蓮」

夢兎の方へ走り出した蓮の足が止まる。

咲斗に呼ばれ、振り向いた。

その刹那。

「…え」

「きやあああああああつ」

多くの悲鳴が聞こえる。

蓮の体に何かの液体が飛んできた。

少しどロついたような赤黒い液体。

蓮にはそれが何か一瞬理解できなかつた。

血。

蓮と咲斗の間に居た5人ほどの人物の大量の血。

それが蓮の全身へと浴びせられた。

何故？

何故血を流している？

5人の体には刃物の傷跡のようなものが残っていた。
蓮が状況を理解しようと既になくなっているであろう人物を見つめ

ていると、その人物の背中に日本刀のような物が刺された。

「あーあ。君達のせいで当たらなかつただろ…ゴミ共」

刀は背中を抉る様にして刺されていた。

その刀を持つていたのは、美しい容姿を持つ1人の少年。蓮と今までにこやかに話していたはずの咲斗だった。

「ごめん蓮。僕は君を恨んではいない。でも…殺さないといけないんだ。神となる為に」

【第五話】 戰鬼

「『めん蓮。僕は君を恨んではいない。でも…殺さないといけないんだ。神となる為に』」

「咲斗…」

蓮は後ずさりしながら震えた声で咲斗の名前を呼ぶ。すると、広間に居る人間は騒ぎ出し、いつせいに出口へ走りだす。出口に向かっていないのは、彪雅、珀雅、蓮、夢鬼。そして、城の使用人や、夢鬼の部下だけだった。

「珀雅、たしかあの男…」

彪雅は深刻そうな表情で珀雅と顔を見合させた。

「ああ、金雪 咲斗…蓮と同じ『神候補』の一人だ。でも…」

珀雅が何か言いかけると同時に、咲斗が動いた。

「でもね、蓮。君を殺さなくても良い方法がある。知りたい？」

咲斗は足を一步踏み出す。

「何を…言つて…」

蓮は完全に怯み、足が上手く動かない。

「それはね

『伏せて下さい』

蓮の耳に微かに声が聞こえる「伏せろ」と。

蓮はそれが本当に聞こえたのかどうかも分からぬまま、その場に伏せる。

バキッ

聞こえたのは、木の枝が折れたような鋭い音だった。数秒待ち、顔を上げる。

すると、ついさっきまで刀を持ち、笑みを浮かべていた咲斗は床に

倒され、その上には、夢兎がナイフを構えていた。

「ああ、すみません。腕の骨、折ってしまいましたか？」

「……貴様……！」

咲斗は夢兎を睨みつける。

「貴方は下がつていてください。ここは自分で何とかできます。

彪雅と珀雅は蓮の腕を掴むと、出口へ向かう。

「蓮、アイツはマジでヤバイ！走れ！」

「でも夢兎……」

「夢兎なら大丈夫だ！だからもつと速く……！」

3人は出口を出た。

「……何故貴方がここに居るんです」「はは、分かつてゐるでしょ」

夢兎の問いに、咲斗は笑つて見せた。

「……蓮には絶対に手を出させません。」

「君には無理だよ。それに、蓮は僕の友達だから、きっと分かつてくれる」

「……いやだ……。もう……。貴方は何度も自分を苦しめたら気がすむんですか？」

夢兎は、ナイフを構えていた腕をだらんと下ろした。

すると、その瞬間咲斗は起き上がり、刀を再度握り締めた

「言つておくけど、僕が君を苦しめてるんじゃない。君は自分で自分を傷つけてるんだ。そんな事も分からぬい？」

「つ・・・！」

咲斗は夢兎にされていたように夢兎の上に乗る。

「君はいつだつてそうだ。自分が被害者だと思つてる。そんな君のせい今までどんなに僕が傷ついたか分からないよね？」

咲斗が語りかけるも、夢兎は無表情のままだ。

「・・・分からぬ。・・・分かりたくも無いですよ。自分は・・・
貴方が嫌いです、咲斗」

夢兎の返答を聞くと、咲斗は悲しそうに微笑んだ。

「…そつか。はは…じゃあ仕方ないね…」

「さよなら、「夢兎」」

【第五話】 戦鬼。（後書き）

今日は短めにしました
なのに時間がかかりすぎですね…;
今汗がハンパ無いです()

【第六話】 仲間兔（前書き）

少しグロく感じる表現が含まれます。
ほんの少しだけ、それでも苦手な方はお引きください；

【第六話】仲間兔。

城の中を走り回る3人。

蓮は息を切らせてきた。

彪雅はそれに気付いたのか、少し走るスピードを落とす。

「ん？…おい彪雅！蓮！遅いぞ！」

珀雅はそう言うと、さらにスピードを上げる。

「まつて、珀雅。蓮が疲れてる。」

珀雅はグイっと彪雅の手を自分の方へ引く。
かなりのスピードを出して走っていた珀雅はいきなり手を引かれ、
よろめいた。

「いつて！なんだよ彪雅！…」

「だから…」

彪雅は蓮へ視線を戻す。

蓮は息切れし、今にも倒れそうにフラフラしていた。
城の中を約3分は全力疾走したのだから仕方ないだろう。

「あ」

彪雅は無表情でそう言つ。

「あ。じゃないよ。もうここまでくれば十分でしょ。」

「あー……。ああ」

「あ」としか言わない珀雅に彪雅はため息をついた。

「それに、夢兎ゆめつるに任せてるし、安全だよ」

蓮はその彪雅の言葉を聞くと、今までさげていた顔をあげて、まだ
息切れしたまま2人に問う。

「はあ…はあ…。夢…兎…。平氣な…かよ…」

「大丈夫？れん。夢兎はあれでも戦闘能力はこの国一番なんだよ。

それに、咲斗さきとを止められるのは夢兎だけだから
「え…？何で…？」

ガガツツツ

蓮が問うと同時に、何かが崩れるような音がした。

「なんだ!? 大広間の方から…」

「大広間!? 夢兎と咲斗の居る

」

3人は一気に走り出す。先ほどの疲れなど無かつたようだ。

「こつちだ！」

珀雅は1人ずつしか通れない細い廊下へ曲がった。

彪雅も続いて曲がる。

蓮は戸惑いつつも2人について行く。

* * *

「さよなら、夢兎。
ゆめと

グサツ……

目の前が紅く染まつて行く。

とても切なくて、悲しい紅へ…。

「つ……！」

夢兎の前では部下、刹兎に包丁で背中肩辺りを刺された咲斗が刹兎を睨みつけていた。

刹兎の前では部下、刹兎に包丁で背中肩辺りを刺された咲斗が刹兎

「はつ…。先輩に手えだそうなんて、俺が許さねえ…。この人の大切な人なら尚更だ。先輩を大切な人の手で傷つけて貰いたくない！」
「刹兔…。刹兔！退きなさい！此処は自分ひとりで何とかできますから！」

夢兔は咲斗の後ろにいる刹兔に叫ぶように訴える。

すると、もう一人の部下の声も聞こえた、

「ダメですよ、夢兔さん。」

「ぐあ…つ」

雪兎。だが、その人物は食事の準備をしていた時の大人しい人物ではなかつた。

刹兔の隣でもう片方の肩をアイスピックで抉るように刺している。
その目は憎しみや嫉妬に似たような狂気に狂つたようだつた。

「兎は寂しいと死んでしまうんですよ。夢兔さんがどんなに平氣でも、僕たちは嫌です。貴方とまだ生きたい。」

「そうつすよ先輩！俺達は貴方のそばに居ますから！」

「2人とも…。」

夢兔は深呼吸すると、小声で何かを呴くように言つた。

「………」

すると、夢兔の右手から金か銀かも分からぬ明るい意色の光が放たれた。

それと同時に、強風のような物が起つた。

その影響で、咲斗は両肩を刺されたまま吹き飛ばされる。

ガガツツツ

「ぐはあつつつ」

咲斗の体は背中を壁に強く打ち付けた。

その衝撃で、刺さっていた凶器が深く刺さり、壁にも影響を与えた。

「はは、凄いですね先輩、さすがだ」

刹兔と雪兎は慣れているのか、床に上手くしがみ付く。

「2人とも、自分の手に拘まつてください。」

夢兎は両手を2人に差し出す。

2人は「はい！」と答えると、その手を取り、目を閉じる。すると再び、夢兎は何かを呟く

「

3人は光に包まる。

「転送魔法第一『I m m e d i a t e l y（即）』」

3人が声をそろえてそう言つと、その光は咲斗の元へ移動し、咲斗を包む。

すると数秒後、その光は咲斗と共に消える。

「任務完了。… ありだとござります、2人とも。」

「いえいえ！ どおつてことないですよ先輩っ」

「…夢兎さんの力になれて嬉しいです」

「…。あと数分で3人方がやつてくるでしょう。2人とも、その血痕を何とかしなさい」

「はいっ」

【第六話】仲間兔（後書き）

はっぴーえんどう（）

何かキリ良すぎましたね

と言ひかコレで話終わつてもいいような気がします（）や

でも続きます！え

【第七話】 血鬼

咲斗の事件。あれから2日。
蓮は夢兎と共に珀雅と彪雅の元へ呼び出された。

「蓮。ここ的生活、慣れた?」

珀雅がいつもより少し柔らかい言葉をかける。

「あ、うん…。まあ…。」

生活には慣れた。それ自体は良い事と言えば良い事だらう。
でもそれとは逆に、蓮の「何故自分がこの世界に来たのか」と叫びつ
問」を知りたいと言う思いが高ぶっていた。

「そつか、そりや良かつた。…ちょっと聞きたいんだけどさ。蓮」
いきなり深刻な顔になる珀雅に蓮は動搖する。

「な、何だよ…」

「咲斗といつあつた?」

咲斗の事を持ち出された蓮はまた動搖する。
2日前。血祭りと言わんばかりの風景。
思い出しただけで蓮に吐き気が込み上げた。
それに、咲斗と会ったのは夢兎と逸れた時。
ハッキリ言つて、逸れたのは夢兎のミスだった。

それを言つてしまふと夢兎は罰を受けることにならないか。蓮はそ
れが心配だった。

少しの間の後、蓮が重い口を開いた。

「…夢兎と一緒に居…つー?」

グッ

夢兎のブーツが蓮の足を潰すように踏みつける

「蓮の席へ連れて行く途中にはぐれてしましました。なので、その
時だと思います。」

「は?夢兎、今なんつった。お前いい加減にしろよ?何だよそれ。」

珀雅は夢兎の方へ一步踏み出した。

夢兎は顔色を変えなかつた。一つ違つるのは、少し俯き加減になつて
いふと言つ事。

「申し訳ありませんでした。全て自分のミスです。」

「…はあ。ま、いいけどよ。お前が咲斗追い払つたんだし。で、夢
兎と逸れた間に咲斗に会つたんだ」

少し安心した蓮は軽く頷いた。

「実はな、蓮。咲斗は…お前が此処へ来る一年前に…お前が見つか
つた場所で、同じように見つかったんだ。」

「…は？」

蓮は思わず素で答える。

「蓮、お前が何でこの世界に来たか分かるか？」

「…つ」

それは、蓮が最も知りたがつていた事だつた。
なのに。咲斗の事を聞いてしまつた蓮は、何故か答えを恐れた。
それを聞いてしまつと、何かが変わる。

自分の何かが。

自分に訪れるであろうその謎の恐怖に蓮は怯えた。

「この世界は、夢で構成されている。つまり、その夢の主がこの世
界の神つて事になるんだ。」

「神…」

蓮が呟くと、今まで喋らなかつた彪雅が口を開いた。

「そう、神。でもね、この世界の住人。つまり僕たちは夢を見る事
はないんだ。ただひとり、夢兎を除いてね」

夢兎が顔を上げる。

目を見開いた夢兎は、動搖したようだつた。

「でもね、夢兎が眠つてみる夢は、蓮たちの世界の事なんだ。つま
り、蓮たちの世界が見えるんだよ。そして、夢兎は神を探す。この

夢の世界の主を

「やめて下さい」

焦つたような声。

その声の主は、動搖しきつた夢兎だった。

「夢兎？ 大丈夫か？」

蓮が夢兎の顔を覗く。

彪雅は「…夢兎」と、切なげな声で夢兎の名を呼んだ。

「夢兎、お前もつと大人になれよ。俺達だつて怖いんだよ。蓮が咲斗みたいにならなかつて」

「え…」

珀雅がふいに言つた一言に蓮は焦るようになつた。

「俺が咲斗みたいについて…どう言う事だよ」

「蓮、今から俺がお前に言つ事は、お前を変えてしまうかも知れない。咲斗みたいにな

自分が、こんな普通の中学生が咲斗のような人格に…
そんな事を考えただけで蓮の背筋は凍りついたような気がした。

「お前は夢兎が選んだ。神候補だ。」

「神候補…」

「そう、候補…本当はな、咲斗も神候補だつたんだ。…蓮、神候補はある力をこの世界に来た時に手に入れるんだ。どんな力かは分からぬけど。」

「やめて下さ…」

夢兎が言つ言葉を無視したまま珀雅が話し続ける。

「咲斗の力は、夢を打ち崩す力だつた。この世界にはあつてはならない力」

「やめ…つ…やめて…ください…」

夢兎は珀雅の腕を掴む。

こんなに動搖した夢兎は見たことがない。

たつた3日共に居ただけの蓮にも分かる。

「咲斗は力の強さに溺れて……あああつた。お前を殺そうとした理由は多分、神候補を殺して自分が神になる為だろ。」

「やめ…やめ…ん……。」

夢兎は隠しナイフをどこからか取り出す。

「夢兎！？」

止めようとした。

止めようとした。

無我夢中で。

蓮は夢兎の手首あたりを掴む。

何もかもを忘れて。

止めようとしていた。

ヒュッ

風を切るような音が耳元で聞こえた。

その瞬間手に激痛が走った。

蓮の手の平から血が滴り落ちていく。

「…痛…い」

夢兎は手に掴んでいたナイフを落とすと、その場に座り込んだ。

「蓮…つ…はあ…はあ…」

夢兎は過呼吸のように息をきらす。

蓮は手を押さえて、フラフラとしたまま、夢兎のナイフを拾つた。

「…！」

すると、氣のせいなのか、ナイフについていた血が動いているように見える。

「なんだよ…これ」

【第七話】 血鬼。（後書き）

はい、意外に長くなつた上に夢鬼はどうしたんでしょ？
更新遅くてすみません…

【第八話】 力兔

氣のせいではなかつた。

ナイフについた少量の血。それは蓮の手を伝い、傷口へ戻つていく。
その光景は不思議だつた。誰から見ても。

こんな夢の世界でも勝手に血が傷口へ戻ることなんてない。

「な……んで……」

夢兎は蓮を凝視した。

夢兔の回復魔法を使わないと起こらないような出来事。

それが勝手に起きてしまつた。

そして気付いた。

神候補、蓮に与えられた力。

修復を中心とした魔法。

神候補に与えられる力には大きく分けて3つの種類がある。

1つ目は咲斗のよさきと破壊系魔法。

2つ目は破壊するほどの力を持たない代わりに、瞬間移動や記憶書き換え、自然の操りが出来る基本魔法。

3つ目は、破壊できない代わりに破壊系魔法や基本魔法を打ち崩す事ができ、回復能力を持つ修復系魔法。

そして、力ごとに必ず与えられるリスクと条件がある。

破壊系魔法は使うことに魔法を発動させた本人の寿命または身体能力を発動することに奪い、自分自身の体力を力に変えなければならない。基本魔法は使う内に感情や記憶を失い、日が落ちている時間は使えない。修復系魔法は、他人に使う事に自分の体力を削り、半径3km以内に信頼する人物がいないと発動しない。

蓮に与えられたのは、3つ目の修復系魔法。

夢兎はそのことに気付き、蓮の腕を握つた。

「貴方は…。自分を信用…してくれていますか？」
いきなりの質問。

夢兎は落ち着きを取り戻していた。

蓮は咄嗟に首を縦に振る。

夢兎は少し安心したようだつた。

「貴方は…。貴方…は…」

…。

静かに夢兎は倒れた。

涙を浮かべながら。

【第八話】 力鬼。（後書き）

何かもう急展開にしそぎましたね。orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1794u/>

Dream rabbit

2011年11月13日01時32分発行